



第128号

2018年6月1日発行

千葉大学教育学部
同窓会

〒263-8522

千葉市稲毛区弥生町1-33



新たな教育課題に対応した教員養成へ

同窓会副会長 重 栖 聡 司
(千葉大学教育学部附属教員養成開発センター長 S52・3卒)

近年、教員の大量退職・大量採用等の影響により、教員の経験年数の均衡が顕著に崩れる中で、学校が直面する課題はこれまで以上に多様化・複雑化するなど、学校を取り巻く環境は大きく変化している。

千葉県においては、四十代教員が極端に少なく、地域によっては二十代、三十代が三分の二以上を占めており、若い教員が即戦力として主任等の役割を担うという状況もみられる。そのような中、新たな課題に柔軟に対応できる指導力と俯瞰的な幅広い視点を持った教員の養成が強く求められている。

現在千葉大学では、三十一年度の学部改革が予定されており、アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善等に関する学習に加え、学校が抱える様々な課題への対応についても、柔軟に学ぶことができる体制づくりを検討している。

特に、すべての学生が特別支援教育等について学び、通常学級に在籍

している障害のある児童生徒の指導等にも応えられる体制にしていく。

さらに、小学校教員を目指す学生が、自信をもって英語の指導ができるようにするための授業科目を検討するなど、英語教育への対応を一層重視した教員養成を目指していくこととしている。

一方、教職課程の学生に、基礎的な指導力を育成し、教員としての適性を考えさせる機会として、教育活動や学校行事、部活動、その他の諸活動を学校現場で長期的に体験させる取り組みが、近年全国的に行われており、本県の「ちば！教職たまごプロジェクト」もその一つである。

これらの取り組みは、理論と実践の往還による実践的指導力の育成に有効であり、千葉大学でも教育実習と相まって、今後積極的に取り組んでいく方針である。

以上、学部の今後について述べさせていた



教育学部の変遷

こほれ話 (その三)

偉大なるかなわが師・わが先輩



黒川 弘
(S28・3卒)

戦後、教育基盤の安定や社会の発展に尽力された先生方や諸先輩の努力は語り尽くせませんが、一端を順不同でお知らせしたいと思います。

教育学部長佐藤良一郎先生、数学の権威。ロンドン大学からドクトル・オブ・フィロソフィの学位を得、卒寿を過ぎてもなお自身の健康管理に精進。門下生が称えて「白寿記念論文選集」を刊行しました。

浅見錦吾(喜舟)先生、苦学力行の士。書星会の創立、毎日展の発展に尽力され、功成り名遂げてもなお「初心忘るべからず」「平凡であれ」と謙虚でした。

鈴木竹松先生、音楽科。熱心な指導に教え子が浄財を出し合い邸宅を寄贈したほどです。

武内和夫先生は、美術科。千葉県下全部の小・中学校に油絵を寄贈するという大事業を達成されました。

飯田朝先生、政治学。個性と自重、平和と秩序を語り、抜群のバランス感覚でした。また、コミュニケーション

重要性を提唱され、千葉市の発展にも貢献されました。

坂本昇一先生、教育学。すでに昭和四十年には「いじめ」について警鐘を鳴らし、対策を提唱された先見の明がありました。

四ノ宮晟先生、心理学。わかりやすく実のある講義でした。学部長在職中に「百年史」を刊行されています。遠山喜一郎先生は元オリンピック体操選手で、新体操の振興に貢献されました。

卒業後母校で教鞭を執られた方も増えました。加藤三郎、小川卓爾、武内和夫、高澤武雄(南総)、國吉丈夫、青柳雅計、秋山衛、貫井正納の各先生方と続いております。

歴代同窓会長狩野政一、作田彦、清水孝平、楠原信一、副会長山田ミツの各先生方。名前を拝見するだけでも頭が下がります。

新制大学発足が昭和二十四年(一九四九年)ですからもうすぐ創立七十年を迎えます。同時期に産声をあげた中学校ではすでに各地で記念式典があげられている昨今です。教育学部も当初は学芸学部教育部として出発しました。今日のような発展を遂げられたことを喜び、皆さんに感謝いたします。(終)



特別寄稿



将棋との出会い

大庭 美夏

(H10・9卒)

十五歳高校生棋士・藤井聡太七段の登場や、羽生善治竜王の国民栄誉賞受賞によって、将棋が注目されている。私が講師をしている地元の教室(所司一門将棋教室)では、「三月のライオン」「聖の青春」など将棋をテーマにした映画やアニメの効果で、昨年初めごろから体験に来る親子が少しずつ増えてきた。藤井四段(当時)の連勝記録継続中には連日のようにテレビの取材が入り、その反響の大ききには驚かされた。

以前は回り将棋やハサミ将棋などの遊び将棋は誰にでも身近なものだったが、今は家庭に盤駒がほとんどないため、将棋に出会うきっかけは少なくなっている。ただ「頭がよくなりそう」「集中力や我慢強さ、礼儀作法などを身につけてほしい」などと期待されて習わせる「おけいこごと」としての将棋は、年々注目度が高まっている。アプリでルールを覚える人も多く、時代は変わってきたなと感じる。

私自身は小学三年生の冬休みに父からルールを教わった。「昔は女性で車の運転をする人はほとんどいなかった。それと同じでこれからは、女性が将棋を指すのも普通のことになるだろう」というのが父の考えだった。

中三の春に、女流棋士の養成機関として新設された「女流育成会」に入会したが、自分がこの道で生きていくという覚悟はなかなか定まらず、「タイトルを取りたい」とは一度も思ったことがなかった。千葉大将棋部では、プロの世界を知らなくても仲間とひたすら楽しみながら指している部員の様子を見て、将棋への向き合い方を改めて考えさせられた。結局女流棋士資格を得たのはプロを目指してから十四年後の二十八歳。大学は昭和六十二年に入学し、途中四年の休学を挟んで卒業まで十一年半かかった。

そんな自分の役目は何かと試行錯誤した結果、八年半ほど対局を

戦った後にトーナメントプロを引退した。現在は、将棋教室で子供たちにルールから教えたり、所属の「日本女子プロ将棋協会」で女性大会の運営や次世代育成に携わっている。回り道はしたが、大学の幅が広がったことは、今の自分の力になっている。

初めて将棋と出会う人に興味を持ってもらおうとする時、教えるほうの棋力はほとんど必要ではない。むしろ、腕自慢の方に「なんでこんな簡単なことができないんだ」という姿勢で教えられ「もう二度とやりたくない」「難しくて自分には無理」とあきらめてしまふ方は多いようだ。逆に、ルール程度しか知らない方が上手に教えて「もつとやりたい!」「おもしろい!」と言われていている現場もたくさん見てきた。教える側は、相手の理解力や気持ちを踏まえながら向き合うことのほうが、将棋の強さより大事ではないかと思う。

そして個人的には、知育的な効果を期待したおけいこごととしてだけでなく、世代を超えて誰でも楽しく交流できるコミュニケーションツールとしての将棋の力を

もつと広められたらと考えている。女性で将棋を指す人はかなり増え、レベルも上がってきているが、まだまだ「男性がやるもの」というイメージも強い。楽しさを伝え、体験させられる指導者を育成し、男女を問わず将棋愛好者をもつと増やしていきたい。

勝負の世界なのでどうしても、強いほうがいいという価値観が抜けない面もあるが、趣味ならば全員が強くなることを目指さなくてもいいし、それぞれの楽しみ方を見つけて将棋を通じて少しでも日々の生活を彩り豊かにしていただければよいのだ。

私は、いつも自信なさげで駒を引いてばかりいた子が、ある時勇氣を出し、攻めて勝ちきった時の上気した顔や、いい手を見つけた瞬間の「わかった!」「やった!」というキラッとした目の輝きを見るのが好きだ。これからも、将棋と出会うきっかけづくり、環境づくりを頑張っていきたい。



シリアの経験

加藤 眞佐美

(H18・3卒)

最近ニュースで話題になっているシリアという国。私はシリアに一九九四年から一九九六年、一九九七年から二〇〇一年の二回、約六年ほど滞在していた。最初は青年海外協力隊として、二回目はJICA（国際協力機構）の調整員として滞在した。シリアと聞いて、読者は何を思い浮かべるだろうか。ここ数年の間、紛争の中心の不穏と恐怖の国だと思われるかもしれない。しかし、私が滞在していた頃は、全く違う国であった。

当時のシリアは途上国ではあったが、人々は非常に豊かな暮らしをしていた。先進国での「豊かさ」とは全く異なる「豊かさ」である。街を走る車は古く、マクドナルドもスーパーもない。様々な生活物資も不足していた。しかし、一方で、シリアは豊かな農業国・酪農国で少ないながらも石油も産出されていた。自国民が自給自足で生活できる物資は充分賄っていたのだ。北にはチグリス・ユーフラテス川が流れ、地中海に面した美しい海岸、緑の多い山々、そして、いにしへの古代の遺跡がいたる所

にあった。何よりも素晴らしかったのは、そこで暮らす人々の素直さと穏やかさである。日々の暮らしを大切に、家族や友人を大切に人間らしく暮らす人々に囲まれた数年間は私の人生の宝物である。青年海外協力隊やJICAの仕事は、途上国の人々を支援することだが、助けられ、多くを学んだのは私である。

そんな素晴らしい国がどうしてこんな事になってしまったのか。弱い者はあつという間に呑み込まれてしまう。私のシリアの友人の多くは国外に逃れて無事に過ごしているが、不自由でなおかつ遣り切れない思いをかかえていることだろう。そんな悲しい思いを共有すると共に、現代社会の一員としての責任を忘れてはならない。近い将来、シリアの再建のときが来たときは、必ず何かしなければと思っ



シリア・シバリ工城にて
一協力隊員の仲間と共に

我が学舎の 今昔 (三)

附属図書館

宮葉 清子

(S50・3卒 千葉市
同窓会報編集委員)

私が、在学していた五十年近く前の図書館は、池と芝生の間の階段を約三十段上った所に玄関があった。入館すると、厳粛な雰囲気



竣工時の附属図書館
(昭和43年9月)

現在の図書館は、旧館（現在はK棟）の南側にN棟、東側にI棟が増築され、西側にL棟が新築さ



利用者に優しい現在の附属図書館
(平成24年3月竣工)

れて、平成二十四年にアカデミック・リンクの発想の下にオープンした。ガラス張りの建物は、文字通り明るく開放的である。

N棟は、対話型コミュニケーションを促す学習空間となっていて、四階まで自由に利用できる。一階エントランスホール横にはプレゼンテーションやイベントに活用できる階段状の広いスペースがある。二階は自由学習空間で会話もできる。三階は教育端末約五十台を自由に使用できる。四階はグループ学習室・個人研究室となっている。

I棟は、研究棟である。

K棟は、図書や雑誌の書架がずらりと並び、静寂の中で閲覧できる。